

あろう。したがって、この點からして國民生産物の成長率がある程度まで緩慢化するであろうということが、強く示唆される」(p. 18)と。

本書全體を通じて、カプラン、グロスマン、その他のソヴェト經濟専門家の分析には、はじめにのべた一種の「體制的盲目」——マルクスのいわゆる生産のブルジョア的形態を生産の絶對的形態と見あやまる宿命的な視野のせまき——によって損われているとはいえ、興味ふかい指摘や有益な示唆が少くない。これにひきかえて、本書でコメントを執筆している2, 3のロシア經濟専門家ならざる著名な經濟學者が、しばしば經濟的分析というよりむしろ最も卑俗な政治的獨斷や一種の社會心理學的臆説をよりどころにして議論をすすめているのは、特徴的なことである。

たとえば、「將來クレムリンの指導者たちが自己の臣下の慰安にこれまでよりはるかに多くの顧慮を示すと考える理由はみあたらない」という理由で、G・グロスマンの主張(急速な經濟成長を今後もつづけるには住宅とurban facilitiesに從來以上の投資が必要になろうという主張)に反対したワシーリー・レオンチェフがそうであり、國際緊張の存在は重工業生産力の擴張を合理化する口實になるとか、假想上の外敵の脅威を利用すれば、高價な警察權力を維持擴張しなくても、國民に消費向上を斷念させる道具に役立つという理由で、カプランの投資政策變更の豫想に反対した、マサチューセツ工業大學のマックス・F・ミリカンがそうである。

だが、これにひきかえ、ソヴェトの具體的な經濟的諸事實に精通している専門家はかなり異った見解をのべている。つまり、彼らは、ソヴェト經濟の中に、軍事生産と國際緊張追求の必然性ではなくて、むしろ逆に、平和への渴望をみいだしている。

たとえば、グレゴリー・グロスマンのいい方にしたがえば、「生活水準がかくも低水準にあり、そして國防上必要な資源の多くは、物理的にみて、消費セクターからは入手できないものである以上は、再軍備のさいの主たる土臺となるものは投資でなければならない。このことは、消費水準の『クッション』ができるまでは、特に重大である。したがって、『冷戦』はソヴェトの經濟的潛力の大はばな發展にとって、きわめて重大な障害とみなされねばならない。平和攻勢は少しも不思議なことではない!(No wonder the peaceoffensive!)」(p. 23)。

(岡 稔)

H・ウォルト, L・ジュリーン共著

『需要分析——計量經濟學における一研究』

Herman Wold in association with Lars Juréen:  
Demand Analysis, A study in econometrics. 1953,  
N. Y. and Stockholm, pp. 358+xvi.

かつて Henry Schultz が「需要の理論と測定」(The Theory and Measurement of Demand, 1938)の中に需要の統計的測定努力の集大成を示して以來、單行書の形をとってこの問題に正面から取組んだ文獻は久しく見られなかった。本書の現れた1953年と Schultz の大著との間には勿論第2次大戰という世界食糧需給の危機が介在したし、特に食料品需要分析への要求とこれに應える諸家の論究(R. Frisch, M. A. Girshick, T. Haavelmo, J. Tobin, R. Stone, etc.)が統計的分析法の精緻化を促進しつつ發表されたのは衆知のとおりである。H. Wold もこの間に伍して需要分析とその統計的測定方法そのものに関する幾つかの論文をものして來たが、彼の母國スウェーデンにおける戦後の食糧需給の諸問題(「配給制の撤廢は果して安全か」「價格統制のみを残して食糧需給は適合するか」「戦前戦後の需要型は同一か」等々)への直接介入の貴重な經驗は遂に彼を驅ってその共同研究者 L. Juréen との共著を世に問うに至らしめたのである。

したがって本書の特徴は著者の直接公表された意圖の如何に拘わらず、客觀的にはスウェーデンにおける食糧需要分析の實際的リサーチ・レポートたる點に見出される。それは本書のリサーチ報告とは直接關連の薄い理論的研究部面の中にさえ絶えずスウェーデン的なるものが漂い流れている點によっても窺われる。もっとも著者自身は序文の中で本書のねらいをリサーチ・レポートたることと計量經濟學の特殊教科書たることの兩面におき、この兩面作戰に基いて本書の構成を次のような5篇に分けている。

- 第1篇 問題と測定結果とに關する概説
- 第2篇 消費者需要のパレート系理論
- 第3篇 靜態確率過程理論の若干問題
- 第4篇 回歸分析の理論と諸方法
- 第5篇 經驗的測定結果

著者のねらいの一半たる計量經濟學の特殊教科書としての一面は、確かに數量的には本書の大部分を占め、最初の4篇の主軸には著者一流の鏗骨な數理的表現による教科書風の解説が丹念にしかもぎっしりと積みあげられている。殊に第2篇におけるパレート系消費者需要理論の

整頓された總復習の場面では、パレト效用理論の前提する基本的諸公理から出發して、スルツキー=シュルツ、ヒックス=アレン、ホテリング=ジュリーソ、レオンチエフ=ヒックス等の諸定理を要約し、物價指數理論の再吟味にまでおよんでおり、確かに今日までの需要函數理論の索引的ハンドブックとしての役割を果そうとしているが、この篇全體として少々壓縮し過ぎた憾みがなくはない。また時系列統計資料の確率的分析方法の1つとして Wold がその昔提唱した靜態的確率過程 Stationary random process (“A Study in the Analysis of Stationary Time-series.” 1938)]を時系列における構造的問題の一部として再論紹介している第3篇にも、このハンドブック的特徴が見とられる。というのも、そもそも1938年の Wold のモノグラフを知るほどの讀者がその新著「需要分析」に期待するであろう第一點は、彼の「靜態的確率過程」の理論が需要分析という具體的な經濟測定問題を通してどのように展開され、前進させられているかにある筈なのに、この第3篇の内容は本書全體の構成にとって少しも方法上の本質的部分を形成していないのである。これこそ本書のハンドブック性を明示する致命點であると共に、同時に筆者が本書の基本的特色をむしろスウェーデンの需要分析調査報告に見出そうとする所以でもある。

スウェーデンの實際需要分析結果(第5篇)を導いた統計方法は第3篇の靜態的確率過程ではなくして、むしろ第4篇の回歸分析法である。Wold は經濟模型として構造的方程式體系(Structural system)よりはむしろ追次的方程式體系(Recursive system)を好む。それは連立的な同時決定的な模型よりは、一方程式が他の方程式を、この關係が更に次の關係を決定してゆく追次的模型の方が經濟豫測の實際に對して好適であるからという。その結果誘導形法に示されるような多くのパラメーターの同時的計測決定よりは、單一方程式毎に衆知の最小二乗法による回歸線をあてはめてパラメーター計測を行う方が實質的に「健全」“sound”であると著者は各所で繰返し主張する。(例えば第1篇第2章)

この主張、いな固守ともいふべき著者の態度は Girshick や Haavelmo などの説くところから見れば、いかにも新しき方法の進展に故意に眼を閉ざし、いたずらに古く安全なるものへの郷愁のみにみちあふれたかの如く感ぜられはするが、しかし Wold がおかれたスウェーデンの食糧需要分析という作業の理論的性格を顧みれば Wold の主張の據って來たる所以の一半が理解出來ぬでもない。すなわちその作業には食糧需要の所得乃至價格彈性の問題はあつても、始めから貯蓄や投資などの

動態的要因は省略されており、食糧需給の豫測はせいぜい比較靜態の基礎の上に行われているに過ぎないからである。著者自ら序文にいう「計量經濟學の特殊教科書」の含意は、このような特殊的問題設定による特殊的方法主張という點まで擴張されるべきものであろうか。

本書のねらいの他の一半(著者によれば)はスウェーデンの食糧需要リサーチの報告である。第5篇は特に共著者 Juréen による計測結果の敘述であるが、そこで示されたスウェーデンにおける食糧需要函數、特に所得彈性および價格彈性の恒常性——それは第二次大戰による食糧統制の實施によって亂されはしたが、1949年春以降の統制解除によって再び戰前の消費者行動が復原している——そのものよりも、われわれにとって關心の的となるのは、これらの諸結果を導き出すに用いた計測のデザインである。そしてこのデザインの準備のためにこそ、(筆者の見方によれば)本書の「教科書的側面」ですらもが極めて特殊な調子を打出しているのであつて、直接第5篇のための統計的作業理論に當てられた第4篇は言うにおよばず、第2篇における需要函數の純理論的取扱いの中にもその準備工作は着々と進められている。就中第2篇第5章に紹介された著者たちの同僚 Törnqvist による一連の需要函數形は本書の全體を貫ぬくスウェーデン的色調の中心をなしている。すなわち需要額  $d$  を何よりもまず所得  $\mu$  の簡単な函數と見、( $d(\mu) = p \cdot q$ )

$$\begin{aligned} \text{〈必需品に對しては〉} \quad & d(\mu) = d(\infty) \frac{\mu}{\mu + \beta} \\ \dots\dots\dots(1) \quad & \beta > 0 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{〈相對的奢侈品に對しては〉} \quad & d(\mu) = d(\infty) \frac{\mu - \mu_0}{\mu + \beta} \\ \dots\dots\dots(2) \quad & \mu_0 > 0, \beta > -\mu_0 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{〈奢侈品に對しては〉} \quad & d(\mu) = a\mu \frac{\mu - \mu_0}{\mu + \beta} \\ \dots\dots\dots(3) \quad & a > 0, \mu_0 > 0, \beta > \mu_0 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{〈劣等財に對しては〉} \quad & d(\mu) = d(\infty) \frac{\mu}{\mu - \beta} \\ \dots\dots\dots(4) \quad & \mu > \beta > 0 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{または} \quad & d(\mu) = d(\infty) \frac{\mu - \mu_0}{\mu - \beta} \\ \dots\dots\dots(4') \quad & \mu > \beta > \mu_0 \end{aligned}$$

をそれぞれ當てて、特にこれらの形がスウェーデンの實際によく適合するものとして推奨している。ここに  $d(\infty)$  は所得の極めて高額な場合にも消費者がその財の購入に向ける有限の一定額を意味し、それゆゑ(1),(2)(4),(4')の函數に對する水平な漸近線を構成する。(3)の  $a$  はこの有限額に代えて所得の一定割合を考えようとするものであつて、函數變化に對して一定角度の漸

近線を構成する。この有限一定額の支出の或る割合を所得の函数として規定する Törnqvist 體系は、家計調査によるクロスセクション法の際特に所得の廣がりが多い場合に、支出の所得弾性  $E$  を一定の大きさとせず、これを所得そのものの函数  $E(\mu)$  として與える點に、特色が見られる。すなわち上の例えば(1)(2)(3)式から  $E(\mu)$  を導けば、それぞれ  $E(\mu) = \frac{\beta}{\mu + \beta}$ ,  $E(\mu) = \frac{(\beta + \mu_0)\mu}{(\mu + \beta)(\mu - \mu_0)}$ ,  $E(\mu) = \frac{\mu^2 + 2\mu\beta - \beta\mu_0}{(\mu + \beta)(\mu - \mu_0)}$  (p. 141, EXERCISE FOR PART II, 12. 参照) となるからである。

著者たちはこの型の需要函数を家計調査のクロス・セクション・データに對し最小二乗法(パラメーター  $d(\infty)$ ,  $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\mu_0$  の扱いに若干の工夫が要るが)を以て回歸分析を行い、これを通常の数式型需要函数への時系列市場データの適用結果に結びつけて、スウェーデンの食糧需要型を判定し需要豫測に利用しようとするのである。その際の詳細な技術的處理法にも論ずべき多くの問題點はあるが、しかし指摘しておかねばならぬ基本的に重要

な一點は、このような實證的經濟分析に際して、單なる經驗的適合のよさを理由に特定のモデルを使用することの危険であつて、本書の體臭ともみられるこの Törnqvist の需要函数モデルについては、いささか經濟論的意味づけの薄弱さを覺えずにはいられない。現にこのモデルを最初に登場させた第2篇第5章において、それまで他のモデルについてはパレト系の本流に載せて消費選好的經濟理論による細密な裏づけを試みているのに、Törnqvist の登場に對しては明かにこのような理論的背景との一應の無縁が表明されている。

結局本書は著者たちの二重の意圖を裏切り、計量經濟學教科書としては極めて特殊な體臭を漂わせ、讀者を屢々細かな堆積煉瓦の山の中に戸惑わせる態のものとなつており、むしろスウェーデンの需要分析報告という特殊内容理解のための準備書というべき性格が強い。ただ本書各篇の末尾に大量に添えられた EXERCISES は、時間をかけて解いてゆけば確かに教科書の實を擧げうる豊富な内容と貴重な引例を含んでいることを附記しておかねばならない。 (伊大知良太郎)